FAIRYTAIL　～姫と半吸血鬼～

月の歌姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＦＡＩＲＹＴＡＩＬ　～姫と半吸血鬼～

【Ｎコード】
Ｎ７６８４Ｙ

【作者名】
月の歌姫

【あらすじ】
ＦＡＩＲＹＴＡＩＬのお話ですっ！！
ぜひ、読んで下さいね♪

#01「ジャンとの出会い」（前書き）

作者「先にいっておきます…ジャンはオリキャラです！！」

？？？「Σなんでそれ言うの？」

作者「それが私だからさ！！」

#01「ジャンとの出会い」

時は夕方、ある森の手前に馬車が止まっていた。

「お嬢ちゃん、起きてくれるかい？」

そう言って馬車の主人は、トートバッグを枕にして眠っているお客の体を揺さぶって起こそうとするが…その客は起きそうにない。

その客は純白のワンピースの上に薄い水色の外套を羽織り、腰にはいくつものポーチが付いたベルトを巻き、首からは紫色の宝石のペンダントと五芒星の水晶が付いた鍵をかけ、肩にかかる程度の灰金（アッシュブロンド）の髪を持つ１０歳の少女だ。

とはいえ、１０歳には思えないほど大人びているため、よく１２・３歳に間違えられることが多い。

（シーオーン。おーきーなーよー）

それを見ていた赤い鬣（たてがみ）を持つ幼竜が少女――シオン・クラウディオに伝えると、やっとシオンは体を起こした。

「う～…もう着いたんですか…？」

シオンは眠そうに目を擦りながら主人に聞く。

「ん～…着いたってワケじゃないんだけど…ここからは歩きでいってほしいんだ…」

申し訳なさそうに主人が言った途端、少女の目つきが変わった。
そして、馬車から降りてバッグをかけると、尋ねる。

「なにかあったんですか？」

「うん…この先に人狼の盗賊がいてね…この辺りの村は、ほぼやられてるんだ。本来なら…お嬢ちゃんの目的地まで送り届けてやりたいが…」

「その件で…泊まるはずの宿まで襲われた…ということですか？」

「ああ…。すまないなあ、お嬢ちゃん…」

馬車の主人は申し訳なさそうに頭を下げる。
それをみたシオンが慌てて言う。

「別に構いませんよ！それに…無理言って乗せてもらったのは私のほうですし…」

シオンがそう言うと、主人は頭をあげた。

「そうだったね…。私は戻らなきゃいけないが…」

「あ、大丈夫ですよ？私、それなりに強いので…」

（アレ…それなりってレベルじゃないよね？）

主人が心配そうにシオンを見ると、シオンは笑顔でそう答え、いつの間にかシオンの腕のなかにいたフリーはツッコんだ。

「なら…いいんだが…。それじゃあ…気をつけてね」

そう言って主人は、シオンに旅行鞄を手渡すと…元来た道を戻って行った。

＊＊

「…行った…よね？」

「行った…ね」

馬車が去った後、シオンはフリーに尋ね、フリーはそれに答えた。

「…じゃ、ケロちゃん、バッボさん、もう出てきてもいいよ♪」

そうシオンが言った途端、シオンの腰に付いているポーチから羽根の生えたオレンジ色のヌイグルミが、旅行鞄から玉に顔がついたケン玉（？）が出てきて、同時に言った。

「「ぶはぁ！！！シンドかった…」」

「息ピッタリだね～ケン玉さんとケルベロスは…」

と…出てきたオレンジ色のヌイグルミとケン玉――――――ケルベロスとバッボを見て、フリーがからかいの言葉を述べる。

途端、バッボが反応した。

「ワシはケン玉ではない！バッボじゃ馬鹿者――――っ！！！！！（

激怒」

「バッボ…頼むから大声出さんといてや！！！耳、痛くなる！！」

ケン玉扱いされ怒鳴るバッボに、ケルベロスが注意する。

「…すまん、ケルベロス殿。つい怒鳴ってしまって…」

「わかってくれればええんや」

と、良い雰囲気なのにも関わらず、フリーが言う。

「やーい、ケン玉怒られた～♪」

「「フリーのせいじゃろ／やろ！！？」」

「ボクのせいじゃなーいもーん♪」

その瞬間、辺りの温度が下がったように感じた。

三人（？）が後ろを振り向くと、恐ろしいほどの爽やかな笑顔のシオンがいた。

「フリー？ふざけるのも大概にしないと…私、怒るよ？」

「「「スイマセン！！！！（汗）」」」

三人（？）の謝罪の声が響き渡った。

その3時間後…、辺りは闇に包まれ始めた。

「すっかり暗くなっちゃたね…」
「ウム…もうすぐ夜になるな…」
「どっか、泊まれるとこあるかなぁ？」
「「「う～ん…」」」
フリー・バッボ・ケルベロスの三人（？）が相談していると、
「…野宿になる…の…カナ～…？」
と、遠い目でシオンが言う。
（（（不味い！！））））
こういう時のシオンは暴走する。
それを理解すると、三人（？）はすぐ行動を起こした。
「うんゴメン、シオン。お願いだから戻ってきて！！（泣」
「だ、大丈夫やて！絶対に泊まるとこ見つかるて！！（汗」
「ウ、ウム…そうじゃぞ、シオン嬢！！希望を捨ててはならん！！」
「…わかってまーす…」
（（（ぜ、絶対わかってない！！！））））
三人（？）が諦めかけたその時、

「キミ、どうかしたんスか？」

その声の主は、三人（？）にとっては救いの神だった。

＊＊

声をかけてきたのは、シオンより２つ年上の１２歳の少年――ジャ

ンだった。
ジャンは跳ねた黒髪に黒目を持つ少年で、この辺りで母親と共に農作物を育て、それを食べたり・売ったりで暮らしているらしい。
シオン達はジャンとそんな会話をしながら、彼の家に向かっていた。
「へえ～マグノリアへ行こうとしてたんスか…」
「はい…でも…「いいんスよ」…え？」
シオンが答える前にジャンは遮ると、続けた。
「わかってるんス…あいつらのことは……」
ジャンはそう言って俯いたが、すぐ咳払いをし、伸びをした。
「さて！早く家に行こうっス！！ウチの母ちゃん、怒るとメッチャ怖いんスよ～だからほら！！」
「わっ！？」
ジャンはシオンの手を引っ張って、自分の家へと向かって行った。

―――シオンに見えないよう…涙を隠して…。

しかし…シオンはその涙に気付いていた…。

＃０１「ジャンとの出会い」（後書き）

作者「次回はナツが登場する…かも？」

ナツ「何故に疑問形！？」

＃０２「会話」（前書き）

作者「今回は若干ですが…主人公の過去にふれたり、もう一人の主人公が出てきます！」

フリー「言っちゃだめじゃん…（呆」

#02「会話」

あの後、ジャンに手を引っ張られたまま彼の家に着いた頃…日はかなり傾き、すでに夜になろうとしていた。

そして…もう遅いので、ジャンの家に泊まる事になったのだった。

「いんや〜食った、食ったぁ〜」

「も、もう食べれんな…」

「おなかいっぱいだよ〜♪」

「…みんな、食べてすぐ寝ないで……／／／／／行儀悪いから…（汗」

ジャンの家で夕飯を食べ終えた直後、横になった三人（？）を見て恥ずかしく思ったシオンは注意した。

「別にいいっスよ。それよりシオン…汗、流してきた方がイイっスよ」

「えっ？いいんですか？」

「ええって、ええって♪女の子は清潔第一なんやから♪」

そう言ったのはジャンの母・ジェーンだ。

ジェーンはジャンとは違い、ベージュの髪に黒目だった。

だが、目は同じだった。

「じゃあ…呼ばれますね♪」

シオンは笑顔でそう言うと、風呂場に向かった。

＊＊

ジャンの家の風呂はいわゆるドラム缶風呂だった。
だが、覗き防止の柵や雨除けのテントが張ってあり、快適だった。

「う～…気持ちいい～♪」

シオンがそのジャン家の風呂を堪能していた時、頭に男性の声が響いた。

（…相変わらずのようだな…お前は…）

（あれ？シンが話しかけてくるなんて…珍しいね？）

（…確かに…そうかもしれんな…）

シオンは驚く様子もなく、心の中で相手の男性――シンに言った。
彼は…シオンは肌身離さず持っている、紫色に輝く宝石のペンダント・絆石（クロスクリスタル）に宿るもう一つの意識。

シンは暫く間をおくと尋ねた。

（――――で、お前は何を悩んでいるんだ？）

直球（ストライクゾーン）、まさにそれだった。
シオンは目を細め、雨除けのテントの天井を見上げ、言った。

（…なんでわかったの？）

（体を共有するようになって3年…。それだけの時間を共に過ごせば…分かるに決まっているだろう…）

――――3年。
その言葉を聞いて、シオンは思った。
もう3年経つのか…あの牢獄から…あの人達に助け出されて…。
シロン達の…力の制御者（サーガ）になって……。
そして…あの男に呪いをかけられ、シンと…体を共有するようになってから…3年……。
シオンは目を一旦とじて…再び目を開けた時、シンに言った。

（もうそんなに経つんだね…）

（ああ…）

暫しの沈黙の後、シオンが言う。

（元に戻れるよね？）

シンは少し間を置いた後、答えた。

（元に戻れるではないだろう。必ず元に戻る…だろう、シオン？）

（そうだね…）

シオンは目を閉じ、今度は気になることをシンに尋ねた。

（ねえ、シン…ジャンさんが言ってたあいつらって…）

（恐らく…あの馬車の主人が言っていた人狼の盗賊だろうな…）

（やっぱり…）

シオンは黙った。シンも黙っている。

だが、ため息のようなものをつくと言った。

（…シオン、今お前が何を考えているかは…理解しているつもりだ…。だが、今は止めておけ…）

（うん…そうだね…）

その言葉を最後に会話は終わり、シオンは風呂から出ると、ジャン達がいる居間へと向かった。

そして…ジェーンとジャンと話していた。

「へえ～シオンちゃんは隣国のレスターバからきたんかい？」

「ええ…マグノリアにある魔導師ギルドに入ろうと思って…」

「ってことは…シオンはあそこに入るつもりなんスね～…」

真夜中、居間でシオンがジャンとジェーンと話していた時だった。
――――――音が聞こえた。
「！！」
最初に気付いたのは、シオンだった。
「シオン、どうしたんスか？」
「…何か妙な音が聞こえる…」
野菜を齧（かじ）る音と、噛み返す音、飲み下す音。
それらが外――――畑の方から聞こえてきた。
「ヤツらがきたみたいっスね…」
そう言ってジャンは、席を立った。
「およしよジャン！今度こそ殺されちまうよ！！」
「大丈夫っス！！母ちゃんはシオンと隠れてるっス！！」
そう言って扉を勢いよく開けると叫んだ。
そこにいるであろう者達に…
「い、いい加減にするっスこの怪物兄弟！！！オイラん家の畑をこれ以上荒らすんなら……？」

しかし、そこにいたのはジャンの知っている者達ではなく――……

「……ア、アンタ…誰っスか？」

――――――桜色の髪に鱗模様のマフラーを身に着けた少年だった。

＃０２「会話」（後書き）

作者「なにげにエロいね…シンさん…。
それにナツ…窃盗＆つまみ食いしてるし…（呆」

シン「気にするな」

作者「いや、気にしようね…？」

#03「ジャンの決意」（前書き）

作者「さて、今回はどんなお話カナ？」

ケロちゃん「なんで語尾カタカナなん？」

#０３「ジャンの決意」

シオンｓｉｄｅ.

その後、ジェーンさんがその男の子を家の中に入れた後、その男の子は野菜を猛スピードで食べていた。
男の子はジャンさんと同い年の１２歳、つまり、２つ年上なんだけど…

年上に見えない…（汗
というか……絶対アレ、喉…詰まらせるよ…（汗

「オバちゃん！この野菜すっごくうまい！！！」

男の子は笑顔でジェーンさんに言った。

「ずうずうしいっスよ…それはオイラと母ちゃんが…一生懸命ｔ…
「人間のお客さんなんていつ以来かね――――――っ！そらっ、たーんとお食べ♪」

少しムカついているジャンさんが男の子に文句を言う前に…ジェーンさんがその背中を叩き、黙らせてから少年の前に野菜を置く。

……かなりいい音したけど大丈夫かな？

「おっ♪あんがとオバちゃん！！」

そう言って、さらに食べる男の子に私は聞いた。

「ところで…あなたは？」
「オレ（おふぇ）？」
「…ゴメン。答えるのは飲み込んでからでいいから…」
男の子が口に含んだまま答えたため、私は呆れていった。
男の子は飲み込むと答えた。
「オレはナツ、ナツ・ドラグニル！オマエはなんていうんだ？」
「私はシオン、シオン・クラウディオだよ……で…こっt…「ボクはフリーっ♪」「わいはケルベロスやで！」「ワシの名はバッボじゃ！」…だよ（汗」
なんでこうゆう時だけタイミングいいのかな…？
しかも…順番に自己紹介してるし…打ち合わせでもしたの！？
ナツさんはフリー・ケロちゃん・バッボさんの順にみると、それぞれに向かって言った。
「……なんかフリー…竜（ドラゴン）みたいだな！」
「いや…みたい…じゃないし…（呆」
本物だからね…
「ケルベロスは…なんかケロちゃんの方があってんな…」
「あ、それボクも思ってた♪」

「おっ、そうなのか？」

「どーゆー意味や！？」

……まあ、その姿を見たらそう思えるよ…

「で……バッボは……ケン玉？」

「ケン玉とはなんじゃ――――！この無礼者が――――――――――――っ！！！！！！！！！！」

お約束…（汗

私がそう思った時、遠吠えが聞こえた。

「この声って…狼？」

その途端、ジャンさんはドアを開けると、すぐ近くの柱を見て悔しそうに呟いた。

「クソッ…！またか…！」

「またって何がだ？」

ナツさんがきくとジャンさんは柱に張り付けてある…ジャンさんにとっては最も見たくないそれを取って、私達に見せてくれた。

「ヤツらの…人狼の盗賊三兄弟・“三つの牙”からの予告状っス…」

悔しそうに拳を握りしめて…言った。

ｓｉｄｅｏｕｔ．

ナツ・ジャン・ジェーンの順に風呂に入った後、全員居間に集まり、ジャンが話し始めた。
ただし……バッボはいびきをかいて眠っていたが…。

「あいつらは…オイラん家の野菜を食べてその味を気に入って…定期的にここに来るようになったんス…」

「あいつらって？」

「最近問題になっとる人狼の盗賊やな…」

首を傾げるナツをよそにケルベロスが言った。
ジャンはそれに頷いた。

「…いつからここに来るようになったの？」

フリーはジャンを気遣い、心配そうに尋ねた。
ジャンは俯くと辛そうな声で答えた。

「オイラん家は一か月前っスけど…この辺りに現れたのは半年前っスね…」

「「「！！！？」」」

ジャンのその言葉にケルベロス・フリー・シオンの3人が固まった。

「半年って…それじゃあ…」

シオンの言葉にジャンは悔しそうな辛そうな顔で頷き、シオンは口を押えた。

ただ一人…ナツはわかってないらしく、頭の上に“？”を浮かべていた。

フリーはそんなナツの耳に小声で教えられたおかげで、やっと理解できた――――――…

――――――この辺りで無事な家は…ジャンの家だけということに…

その事実で誰もが言葉を失った時、今まで寝ていたバッボが言った。

「一か月か…随分(ずいぶん)と嘗(な)められておるのだな…。ジャンとやら…その間にお主は…自らの誇りを胸に戦ったのかな？」

「戦おうとしてるっスよ！……してるっスけど…！！」

ジャンはバッボの言葉に立ち上がると怒鳴ったが…あいつらに立ち向かった時のことを思い出し、黙ってしまった。

「…ムリなんスよ……いざ戦おうとすると…足が震えて…戦えないんスよ…。あいつらに…“意気地なし”っていわれても…言い返せないんス…」

「そりゃあ…いわれてもしかたn…ぶっ！？」

ナツが余計なことを言う前に、フリーがナツの頬を殴った。

「いってぇ……！なにすんだよ！！」

「ナツ！その先は言っちゃダメだよ…！」

「なんでだよ！！？」

「あれ見ればわかるやろ…」

そこには、椅子に座るとテーブルに突っ伏し、何度も悔しそうに呟くジャンの姿があった。

そして、その傍にいたジェーンがジャンの背中を擦りながら言った。

「ナツ君…相手の人狼達…元々は殺す事も躊躇(ためら)わない残虐な盗賊なんだよ…。

だからこれは仕方ないことなんだ…」

「けどいいのオバさん！？畑が荒らされても！？」

「別にいいさ…野菜はまた作り直せばいい…。けど、ジャンは取り返しはきかない。私(あたし)のたった一人の肉親だからね…」

その言葉で誰も…何も言えなくなった。

ひとまず解散した後…シオンはその予告状を自分が寝る部屋へと運んだ。

そして…それを手にしたまま目を瞑(つむ)り、意識を集中した。

その時…アレがきた。

それをみた後…シオンは目を開け、予告状を燃やしベッドに入ると眠った。

目を開けるとシオンは…青紫色の空に包まれ、青と赤の月が重なりあっている不思議な世界にある、薔薇(ローズガーデン)の庭園の真ん中にある噴水の前にいた。

でもそこは…世界のどこにも存在しない場所だった。

何故ならここは…シオンの心が生み出した“心の世界”……いってみれば精神世界だからだ。

そして…シオンがここに来る用はたった一つだけ…。

「呼んだか？シオン」

「シン！」

そう…彼――シン・ヴルムグンに会うためだ…。

シンは灰銀の髪に紅とエメラルドグリーンの虹彩異色（オッドアイ）の瞳を持つ青年で、シオンより人間の年齢でいうと１０コ上の２０歳の青年だ。

だが彼は…年を取らない、否…取るのが遅いのだ。
もちろん、シオンは理由を知っていた…が、今はその話はやめておこう。

今回、シオンがここに来たのは彼に相談するためだ…。

「シン、話があるの…聞いてくれる？」

すると、シンは鼻で笑い言った。

「愚問だな…俺は元からそのつもりだが？」

その次の日の昼、ナツ・フリー・ケルベロス・バッボはジャンの手伝いを、シオンは家でジェーンの手伝いをしていた時だった…。

ジャンの手伝いをしていたナツとフリーが言った。

「ねえジャン!!ボクたちにまかせてよ!!!」

「何をっスか?」

「“三つの牙”の退治だよ！！予告状がきたってことはソイツら来るんだろ！？」

二人の発言にケルベロスが驚いた。

「本気かいな？！フリーはともかく、ナツは大丈夫なんか！？」

「「それどーゆー意味！？」」

フリーとナツがハモった直後、バッボが言った。

「ほぉ――――っ…カッコよいのぉフリー！ま、ガンバルのじゃぞ――――っ♪」

「何いってんの？ケルベロスもケンだ…バッボもやるんだよ？」↑

「Σわいもかあ！？」

「なんでじゃ？」

すると、フリーは何かを企んだような顔をして言った。

「だってケルベロスぅ～…頑張ったらシオンの特製デザート食べれるかもしれないよ？それに、バッボは紳士（ジェントルマン）なんでしょ？紳士（ジェントルマン）は困ってる人を助けるものだと思うなあ～…」

その言葉で、二人（？）のスイッチが入った。

「いよっしゃあああああぁぁぁ！！やったろうやないかあああああぁぁぁ！！！！」

「ふっ…致し方あるまい…紳士(ジェントルマン)としては…見過ごせぬなあ…」

と、盛り上がってる二人（？）をみて、ジャンは笑った。

「フリー、ナツ、ケルベロス、バッボ…アンタら…いいヤツっスね…。けど、ケッコウ！！」

その瞬間、ケルベロスとバッボの上に“ゴーン”という字の石が落ちてきた。

「な、なんでだよ！？」

「オイラとしてもありがたいっスよ？でも…それじゃあダメなんス！オイラは…オイラは――――――――

オイラは自分の力で道を開きたいんス！！そして…意気地なしを捨てるんス！！！！」

そう言い切った。

「ジャン…！「よせフリー」バッボ！でも…！！！！」

「今のジャンの言葉を聞いたじゃろう…彼は今、真の男になろうとしておるのだ…察してやれ…」

「…ぅん……」

フリーはまだ納得がいかないようだったが、渋々了承した。

因みにバッボの発言はこの後「今のワシどうじゃった？！ダンディーであったか？カッコよかったか！！？」の一言で帳消しになった。

そしてその後は…フリーとバッボが何か話したり…ケルベロスがシオンに何かを頼まれ、その作業をしたりして過ごした…。

そして……夜が来た――――――――――――――――……

＃０３「ジャンの決意」（後書き）

作者「ヤバい…シンがカッコ良すぎる…逆にバッボカッコ悪っ！！（笑）」

＃０４「真夜中の戦い～前編～」（前書き）

作者「今回は２話に渡って書こうと思います！！」

#０４「真夜中の戦い～前編～」

ジャンｓｉｄｅ.

その日の夜…みんなが寝静まった頃、オイラはクワを背負い、手頃な木の棒を傍らにおくと…父ちゃんの形見の古びた短剣(ダガー)を見ていた。

その時…昨日の夜にバッボが言った言葉を思い出していた…。

『随分(ずいぶん)と嘗(な)められておるのだな…。ジャンとやら…お主は自らの誇りを胸に戦ったのかな？』

「自らの誇り…か……。考えた事なかったっスね…。そういえばよく、父ちゃんも言ってたっけ…」

オイラの父ちゃん…ウォーカーは聖十大魔道(せいてんだいまどう)の一人で、昔、荒れ果てていたこの辺りの土地を一人で開拓した偉大な人で、よく話を聞いていた。

そしてなかでも…この言葉は特に印象的だった。

『いいかジャン？誇りってのは己の覚悟だ！その事を忘れんなよ？』

あの時は…どうゆう意味なんだろうと考えていたけど…今ならわか

る。

（父ちゃん…見ててくれっス…）

オイラは短剣（ダガー）を腰に刺し、棒を持ってドアを開けた。
そこにヤツらは…いた（・・）。

「お――――？意気地なしのジャン君じゃあないですか…」

わざと敬語を使って話している人狼兄弟の次男・紅牙（こうが）。

「ま――――た出てきたのかよォ――――――？ヒヒヒッ！」

変な喋り方をする人狼兄弟の末っ子・狂牙（きょうが）。

「そんなもの持って…これから畑仕事でもするのか…？ジャンよお…？」

そして…一番凶悪な人狼兄弟の長男・王牙（おうが）。
いつ見ても怖い…でも…！！

「…い、いい加減にするっス！！家（ウチ）の畑をこれ以上荒らすと…」

「荒らすと…なんだ？」

王牙は自分の爪をギラリと光らせ、脅してくる。

「でましたねェ…お決まりのセリフが…」

「ワインとか、チィズゥーとかでもくれんのかァ？ヒヒヒヒヒッ！」
紅牙は丁寧だけど嫌味をたっぷりこめて、狂牙は名前の通りの喋り方で挑発してくる。
…足が震えてくる。でも…っ！！
オイラは腰の短剣（ダガー）の握り手を握り締めて深呼吸をし、あいつらを睨んで叫んだ。
「ぶっとばすっ！！！！」
そして駆け出し…棒を振り上げて…雄叫びを上げた。
「うおおおおおぉぉぉぉぉっ！！！！」
オイラは…意気地なしじゃないっス！！！！
ｓｉｄｅｏｕｔ．
真夜中…ジャンは雄叫びを上げながら人狼兄弟に向かって走っていた。
「うおおおおおぉぉぉぉぉっ！！！！」
「ちっ…。紅牙、狂、やれ…」
「やれやれ…仕方ありませんねェ…」

「まかせとけって王のアニィ！」

そう言うと紅牙はジャンの頬を殴り、狂牙はその後…腹に蹴りを入れ、ジャンを吹っ飛ばした。
その反動で落とした棒を紅牙が拾い、ジャンに向かって狂牙が言った。

「おいおいおいおいおーい…？ジャ――ン？今なんて言ったよォ？」

「聞き違いじゃなければ…“ぶっ飛ばす”って聞こえましたねェ？」

バキッ！！

簡単に紅牙は木の棒を折った。
ジャンは恐怖と痛みを感じていた。

（い…痛い…！けど！）

ジャンは立ち上がると、背中のクワを取り、叫んだ。

「ああ！！オイラはお前らをぶっとばす！！！」

「ヒヒヒヒッ！！ぶっとばすって一人でかァ？…d「一人じゃねえ！二人だ！！！」

「「「「！！！！？」」」」

ジャンは突然、背後から聞こえた声に驚くと振り返ってみた。
そこには眠ったと思っていたナツが屋根の上にいた。

「ニシシシッ！オレがいればさっきよりはマシになんだ…ろっ！？」
その瞬間、ナツは足を滑らせ「ぬ〝あ〝――――――っ！？」とか叫びながら落ちた。
だがすぐ起き上りジャンの近くに走って来た。
「ナ…ナツ？寝たんじゃあ…なかったんスか？」
「はあ？こんな面白そうなことがあんのに寝るワケねーじゃん！！」
↑
「イヤ、全くおもしろくないっスから…でも…」
「おう！」
二人はキッと紅牙と狂牙を睨むと走り出し、攻撃した。
その攻撃を受けた紅牙と狂牙はニタリと笑った。
「ほほう…聞き違いではなかったみたいですね…」
「ヒヒッ…イイじゃん、イイじゃん♪遊んでやんよォ！！！」
そういうと、紅牙はジャンと狂牙はナツに向かって行った。
その様子を見た王牙は喉を鳴らせて笑った。
「ククククッ……紅牙も狂牙も付き合いがいいな…」
そして…畑の野菜を取ろうとした時、男が背後にいた――――――。

全身を黒一色で包み、片目を前髪で隠した白髪の男が……いた。
王牙は肩越しに、その男に向かって言った。

「この気配…ディオロットの旦那じゃねえか…」

男――ディオロットと呼ばれた男は鼻で笑うと言った。

「…相変わらずくだらん遊びをしているようだな、王牙。まあいい…今回は仕事の依頼に来た…」

ディオロットの発言に王牙は驚いた。

いつも神出鬼没でつかみどころのない男だったが…逆らってはいけないと本能で悟っていた。

その男が自分に依頼しにきたのだ…驚くのも無理はない。
ディオロットは続ける。

「…内容はある人物の捜索だ。報酬は15万J(ジュエル)…どうだ？やるか？」

「ああ…やるぜ…その前に、あの“バカ”共を片付けてからでいいか？」

王牙は間髪いれずに答え、ナツとジャンを親指で示した。
ディオロットはその二人を一瞥すると、背を向け答えた。

「私には関係のないことだ……だが、依頼はすっぽかすなよ…じゃあな…」

そう言うとディオロットは歩きだした…が、すぐに立ち止まると言

った。

「言い忘れていたが…そいつらはかなりの手練れだ…見た目に騙されるなよ…」

意味深な言葉を言った後、ディオロットは消えた。

その直後、ジャンが紅牙のパンチをモロに喰らった拍子にクワは折れ、そのまま膝をついた。

「ぐぁっ……！」

「ジャン！」

「どこ見てんだよォ！！！」

「がっ……」

ジャンを心配して振り向いたナツに、狂牙は蹴りを喰らわせナツを吹っ飛ばし、押さえつけた。
ジャンは殴られた箇所を押えながら立ち上がった。

「いっ…てえ……！」

その時、王牙がジャンに近づいて囁いた。

「おい、ジャン…俺達はここの野菜…結構気にいってんだ…。だから、その野菜を作ってるお前は殺さないが…これ以上抵抗するってんなら――――――――

――――――――――――お前のお袋とあのガキを殺す……」

ジャンｓｉｄｅ.

今、なんて言った？母ちゃんとナツを……殺す？

「お前は確か…作物作りに関しては天才なんだろ？なら…お前がいればこれは食える…いくらでもな…」

ニヤリと笑い、王牙は囁く。それに、狂牙と紅牙がつなぐ。

「だけどよォ…オマエらはオレたちに逆らっちまったよなァ？」

「だから…あのババア…いや、君の母親は見せしめですよ…」

見せしめ？
たったそれだけのために…母ちゃんを殺す？
怖いけど…あの優しい母ちゃんを…殺す？

「させないっス……！！」
オイラは腰の短剣（ダガー）の柄に手を置いた。
その途端、王牙達の目つきが変わった。
「…ジャン…なんのつもりだ？」
「まさか…その古びた短剣を抜くつもりですか？」
「そんな古びた短剣でナニができるんだよォ？」

王牙達の言葉を無視して、オイラは目を閉じた途端……父ちゃんの最後の言葉が脳裏に浮かんだ。

『――――――ジャン…お前もいつか戦う時が来る……。その時お前は……何のために戦う？』

「オイラは……」

そして…昨日の晩…母ちゃんの言った…あの言葉も……。

『野菜はまた作り直せばいい…けど、ジャンは取り返しはきかない…私（あたし）のたった一人の肉親だからね…』

その瞬間、決まった。

オイラが戦う理由は…父ちゃんの残したこの場所と…そして――――

「オイラにとってもそうっスよ！！母ちゃん！！！！！」

――――――母ちゃんを守るためっス！！

そして…短剣（ダガー）が抜いて、王牙の牙を叩き斬った。
暫く…誰も動けなかった。
だが……オイラの攻撃で王牙はキレたようだ。

「っ……ああ…わあったよジャン……てめえを殺す！」
そう言って王牙はオイラを攻撃してきた、が、オイラはそれを剣で受けながら叫んだ。
「何度でも言ってやるっス！！お前らをぶっとばす！！！！！」
その瞬間、オイラの腹に王牙の拳が当たり、オイラは血を吐いて…宙を舞った。
ｓｉｄｅｏｕｔ．

暫く経って…ジャンが落ちてきた時、狂牙は笑った。
「ウヒャヒャヒャヒャヒャ！ヨエ———なァ！！」
「さすが…王牙兄さんですね…」
そんな紅牙達に王牙は近づくと言った。
「狂牙…お前はそのガキを殺せ……紅牙は中で寝てる婆さんをやれ…」
「了解です」
「リョーカイだぜェ……っとその前に食ってもいいか王のアニィ？」

「さっさと食え…」

「ヘイヘーイ♪」

そう言って狂牙は傍にあった野菜を口に放り込んだ…その瞬間……――――――――!!

――――――――――ガキィィィンッ……!!

と、妙な音が狂牙の口の中からした…。

「い゛っ……！？なっ…なん…」

狂牙は口の中に放り込んだ野菜を見て…驚いた。

何故なら…顔がついていたからだ…。

そして…それはこう怒鳴った。

「貴様……紳士を口の中に入れるとはぁ…………ぬわあぁにを考えておるかぁっ！！この…………無礼者がぁ——————————っ！！！！！！！！！！！」

そのままそれは狂牙を吹っ飛ばした。
その声に…ジャンとナツは聞き覚えがあった。

王牙と紅牙は突然の妙な声に驚いたと同時に…茂みから飛び出した二つの影によって、狂牙がいる方向に飛ばされ、見事にぶつかった。

その二つの影が着地した時、正体が分かった。
一人は紫色の帽子を被った同い年くらいの少年、一匹は翼を生やした黄金の瞳を持つライオン。

少年は二人に駆け寄ると言った。

「ナツ、ジャン！！二人とも大丈夫！？すぐ、手当するから！！」

「大丈夫そうやないやろ…フリー！バッボのやつが吹っ飛ばさんかったらどないする気やったんや？！」

「それは……ま、まあなんとかなるよ！！！！」

「アホか――――――っ！もう少し遅かったら完全にアウトになっとったんやで！？」

「うっ……ゴメン、ケルベロス…」

「「フリーとケルベロスぅ！！！！？」」

ナツとジャンは少年とライオン――人間の姿のフリーと真の姿となっているケルベロスを見て驚きの声を上げた時、足元から先程の声がジャンに言った。

「男になったのうジャン！立派じゃったぞ！！」

「バッボ…っスよね…？」

「おお！！気付いたか！？どうじゃ、カッコいいか？渋いじゃろ！？」

ジャンは野菜と同じ色目・模様になっているバッボをみて驚き、バッボはその顔を見て嬉しそうに飛び跳ねた。

「なんで色塗ってあるんや？」

「フフフ…実はな――――――――

※回想～バッボｓｉｄｅ．※

夕方頃…ワシがフリーと話していた時じゃ…。

『……何ィ、ワシの体に色を塗るぅ？』

『うん』

『バカかお前は？そんなことして…ワシのこのキラキラした肌にシミがついたらどうするのだ！
バカ。バ――――カ』

『（ピキッ）……わかってないなあバッボ…バッボって、服きてないでしょ？』

『まあ、丸いしな』

『だよね！丸いと服きれないもんねっ♪（？）だから色を塗るんだよ♪コレはオシャレ！紳士ってオシャレにも気をつかうものでしょ？』

『・・・・・』

※回想終了～ｓｉｄｅｏｕｔ．※

――――――と、いうわけなんじゃが…どうよ、似合うか！？前のワシとどっちがよい！？自分ではなにが描いてあるのかわからんのでな！！」

（（（わからないほうがイイと思う……））））

フリーにうまく利用されたことを知らず、はしゃいで言うバッボを見て…ナツ・ジャン・ケルベロスは思った。
その時、シオンが来た。

「二人とも…大丈夫だったみたいだね…よかった…」

「いや…全然大丈夫じゃねえよ…。オレ…手が出せなかった…」

「オイラもっス…」

「そんなことないよ…二人はよく戦ったと思うよ…だから…元気出して？」

そう言ってシオンはニコッと笑った。
途端、その笑顔を見たナツとジャンは顔を真っ赤にした。

「／／／／／／お…おう！！」

「／／／／／／あ、ありがとうっス…」

「？どういたしまして♪あっ、そうだ…二人とも…手を出してくれないかな？」

「「？」」

シオンに頼まれ、二人が手を出すと…シオンはその手にタッチした。

「「え？」」

「選手交代っ♪あとは、私に任せてね！」

そう言うとシオンはバッボの体の一部であるハンマーを持つと“三つの牙”の下へと歩き出した。

「シ…シオン一人でやんのか！？」

「危ないっスよ！！」

「大丈夫…絶対、大丈夫だから…信じてて？それに…一人じゃないし…カッコいい二人の姿を見て黙ってたら…“七騎士（セブンウォーリアーズ）”の皆に怒られちゃうしね！！」

と、またもあの悩殺スマイルでそんなこと言うものだからさらに二人の顔は赤くなった。

そして…シオンは“三つの牙”のすぐ傍に来ていた。

「いっつ……なっ…なんなんだァ！？野菜が喋ったァ？！」

「というか…誰でしょうか？あの娘は…？」

「嬢ちゃん…俺達になんか用か？」

「…ジャンさんに言った言葉…撤回して…謝罪して下さい。そして……二度とここには来ないでください！！」

シオンがそう叫んだ途端、王牙が傍にあった木を殴り折った。

そして…シオンを睨んで言った。

「ほう……断ると言ったらどうすんだ？」

シオンは目を閉じた。

そして…暫く間をおいてから…目を開くと“三つの牙”を睨み、凛とした力強い声で言った。

「…貴方達の頭を冷やして、謝罪させます！！！！」

＃０４「真夜中の戦い～前編～」（後書き）

作者「シオンちゃん……カッコよすぎ！！！！」

ケロちゃん「Σ普通はかわいいやろ？！」

＃０５「真夜中の戦い～後編～」（前書き）

ジャンと“三つの牙”との戦い…決着です！

＃０５「真夜中の戦い～後編～」

真夜中――――
対峙するは……少女・シオンと人狼の盗賊三兄弟・“三つの牙”。

「バッボさん……行くよ！」

「ウム！」

シオンは自分のパートナーであるバッボに言うと、それにバッボが答える。

そのバッボを見て王牙（おうが）は眉を顰（ひそ）めた。

（あの鉄球付の金槌……レスターバのヤツらが使う妙なアクセサリーに似てんな…。それに…あの嬢ちゃん…最近、盗賊仲間の間で噂になってる例の盗賊駆除屋（ロバーズキラー）と同じ髪色じゃねえか…？まさか……いや、それはねえな……）

王牙は考えを取り消すと、弟達・紅牙（こうが）と狂牙（きょうが）に指示した。

「紅牙、狂牙…予定変更だ…先にあの小生意気な小娘を殺れ！」

「ケケケケッ！王のアニィ…」

「言われなくても…そのつもりですよ！！！」

そう言うと、紅牙と狂牙はシオンに叫びながら襲い掛る！

「バラ肉にしてやんよォ――――――――――――――――――――――――――――――――ッ！！！！」

「覚悟！！！」

しかし、シオンはそれを…後ろに跳んだだけでかわした…。
それをを見たナツとジャンは目玉が飛び出るくらい驚いた。

「あっさり避けたぁ――――――――――っ！？？」

「っていうか今…！！後ろに跳んだだけでかわしたんスか！？」

そう言ってケルベロスとフリーを見るジャン。
ケルベロスは唸ると苦笑混じりに答えた。

「う～ん…やっぱ、驚くわなぁ～…」

「まあでも、シオンが言うには…『相手の動きをみてれば簡単』らしいけど…そんなことできるのって…あんまいないよね？」

ナツとジャンは激しく頷き、これに同意した。

しかし、驚いているのは紅牙達も一緒だった。

「何っ……！？」

「ッ！この小娘ェ！！！」

「（今のあの動き…まさか…！？）まて狂牙！！」

王牙の静止の声も聞かず、狂牙はシオンに突っ込んだ。
そんな狂牙にシオンは鉄球…つまりはバッボ本体を投げつけた。

「ぐぇっ…！」

「狂牙！この…っ！？」

紅牙は目を瞠(みは)った…。
何故ならシオンが…身の丈サイズのハンマーを振りかぶっていたからだ…。
しかも…自分の目の前でだ。

「はあっ！！！」

「んがっ！？？」

シオンがそれを振り下ろすと、見事に紅牙の頭にヒットした。
その攻撃に紅牙と狂牙がキレた。

「っ……！いい気になんじゃねえよ小娘がぁ！！！！！！」

「ぶっ殺してやるっ……！！！！！」

「まて紅牙！狂牙！そのガキは……」

しかし王牙の言葉は完全に頭にきている紅牙と狂牙には届かず、二人はシオンに突っ込んだ。
それをシオンは待っていた。

「バッボ…Ｖｅｒ．３(バージョンスリー)！」

シオンが叫ぶとバッボが光り、変形した。

ナツｓｉｄｅ．

「バッボ…Ｖｅｒ．３！」

シオンのヤツがそう叫ぶと…けん玉みたいなヤツ…バッボが光って形が変わり始めた……。

「バッボが光ってる！？それに…なんか形が変わり始めてないっスか！！？」

「いったい、どうなってんだよ！？」

ジャンとオレが騒いでいると、フリーと同じ匂いのするヤツが言った。

「あれ？まだ言ってなかったっけ？バッボは、天空郷アトラにあると云われている魔法道具…ＡＲＭって呼ばれる代物の一つなんだよ♪」

「あーむ？」

聞いたことのない単語を聞いて、オレはフリーに聞こうとした時にはバッボの変形がほぼ終わっていた……。

って、

ちょっと待て。

え？ちょっと待て！！！なんだよあれ？！
あきらかに体格に合わねえだろソレ！！！

シオンが持っている武器を見て、オレは驚いた。
なんでかっていうと……

シオンの倍はある巨大な斧になっていたからだ。

ｓｉｄｅｏｕｔ．

「戦斧（アックス）！」

変形が完了すると同時にシオンが叫んだ。

その斧を…腰を落として重心を低くし、刃先を地面につけた体勢に構える。

そして、目を半開きにし息を吸った。

「スゥ――――――…」

それを見たケルベロスとフリーは、紅牙と狂牙の無事を祈った。

理由はバッボの現在の形態とシオンの構えだ。

バッボの第三の形態…Ｖｅｒ．３（バージョンスリー）・戦斧（アックス）は、“七騎士（セブンウォーリアーズ）”の“剛力の騎士”の武器をモデルにしたモノ。

シオンの構えは…“最高の癒し手”であり“最強の少女騎士”が使用する古式戦闘術・祓（はらい）の構え。

実はこの二人…シオンがこの二つを使用したところを見た事がある。

その後、その事を“七騎士（セブンウォーリアーズ）”のメンバー全員に話すと、すぐシオンに「それはいざという時にだけ、もしくは人間相手じゃなければ使用するように！」と念を押された。

それは何故か…？

答えは今に理解できるだろう…。

「「死ねや小娘えええぇぇぇ！！！！」」

「シオン！！」

「早く避けっ……ってえええええええぇぇぇぇっ！！？」

何故ジャンが驚いているのか……その理由は――――――

シオンがその斧をいとも容易く横に振り、狂牙と紅牙を15～8mくらい吹っ飛ばしたからだ。

それを見たケルベロスとフリーは……

「…かなり飛ばしたなあ…」

「記録更新したんじゃないの？」
と、言い…それにナツとジャンが、
「「そんなこと言ってる場合！！？」」
と、突っ込んだ。
その間に…シオンはバッボを元に戻すと、王牙を睨んだ。
「次は貴方の番ですよ？」
「ぐっ……まさかとは思うが…お前があの盗賊駆除屋（ロバーズキラー）なのか！？」
睨まれた王牙は、シオンに向かって大声で尋ねた。
それを聞いたジャンが驚く。
「盗賊駆除屋（ロバーズキラー）？！ってまさか…あの！？」
「なんだよジャン、知ってんのか？」
ナツの質問にジャンは頷くと説明し始めた。
「盗賊駆除屋（ロバーズキラー）ってゆうのは最近…というか二週間前からなんスけど、盗賊を退治している魔導師二人組のことっス…。確か二人とも…さっきフリーが言ったＡＲＭ（アーム）の使い手でもあり、失われた魔法（ロストマジック）の使い手でもあるらしいッス」
「二人ぃ？…まさか、シオンが二人いんのか！？」
「「「んなワケないから」」」

ナツの発言(ボケ)にジャン達三人が突っ込んだ後、咳払いをしてからケルベロスが言った。

「まあ確かに…そう思うのもムリないわなあ…」

「だね。ボソッ）それに…今まで前例がないだろうしね…」

「？フリー、なんか言ったか？」

「……！なんでもないよ♪」

「ならいいっスけど…」

四人が会話を終えたと同時に、王牙はシオンに左腕で攻撃した。
それをシオンは右に避けてかわしたが…王牙は先程の二人と違った。

「甘いなあ！！！」

その後に右腕を横に振った。
鋭く尖らせた爪を持つ右腕を…振った。

「っ……」

間一髪で、シオンは避けたが…頬が少し切れた。
そのせいで動きが鈍くなり、それを王牙が見逃すはずはなかった。

「どうした？さっきまでの威勢はどこにいったんだよ…！！」

「う〝っ……！」

猛攻――、それがピッタリな言葉だった。
王牙はこれがチャンスとばかりにシオンを殴り、蹴り、切り裂いた。
その様子を見たジャンが叫んだ。
「まっ…マズイっスよ！！このままじゃシオンが…！！」
「よお――しっ！助けにい…」
だが、ナツの言葉は続かなかった。
いや、シオンの匂いを嗅いで止まった。
「どうしたんスか！？ナツ！！早くシオンを…「なあケルベロス…」
ナツはジャンの言葉を遮ると、続けた。
「アイツ――――

――――――誰だ？」

「「「！！？」」」

ナツの言葉にケルベロスとフリーは顔を見合わせ、ジャンは憤慨した。

「何言ってんスかナツ！！あれはシオン以外の何者でもっスよ！！！？」

「そうなんだけどよ…匂いがなんか…違うんだよなあ…」

「に、匂い？」

ジャンはナツの言葉に混乱し呟いた時、シオンの姿が長い水色の髪に着物を纏った少女になった。

それを見てジャンは驚き、ケルベロス達をみた。

ケルベロスはため息をつくと、言った。

「すまんなあ二人とも…騙すつもりやなかったんやけど…」

少しすまなそうに言うケルベロスの言葉をフリーが引き継ぎ、悲しそうに言った。

「シオンが…ううん、『鏡』があいつらの出方をみるって言ってこうしたんだ…」

「ミラー？鏡って意味っスよね？」

「うん…シオンの使う魔法は四つあって…その一つが『クロウカード』っていうカードを使うんだ…。そして…『鏡』はその一つなんだ…」

「へえ～…ってちょっと待て。ってことはカードが提案したってことか！？」

フリーの言葉に疑問を持ったナツが尋ねるとケルベロスが説明した。

「…シオンやわいはカードの声を聞けるんや…。やから、『鏡』のヤツがその案を出した時はホンマ驚いたで反対したんやけど…『鏡』のヤツ…変なトコ、シオンに似とってなあ…全然聞かへんかったんよ…」

「なるほど…。ところで、いつ入れ替わったんっスか？」

「え？さっきこっちに来た時にはもう『鏡』だったよ？」

「「はい？」」

ナツ達がそんな会話している時、王牙はというと驚いて攻撃を止め、考え込んでいた。

（こいつ…身代わりか？だとしたら…本物はどこにいるんだ？）

王牙が疑問に思い、辺りを嗅ごうとした時…急に王牙の上空が曇りだした。

「ん？なんだ？」

そう言って、見上げようとしたその時…！

「『雷（サンダー）』！！！」

と、凛々しいシオンの言葉と共に雷が落ち、王牙に直撃した。

「ぐあああぁぁぁっ！！！？」

突然、雷が自分に落ちてきたので王牙は避けるひまがなく、驚きの声を上げる。

そして数秒後には…黒焦げになって倒れた。

その直後、復活した紅牙と狂牙が黒焦げになった王牙を見て、叫んだ。

「お、王牙兄さん！！」「王のアニィ！！」

その二人をみてフリーが…シオンに向かって叫んだ。

「あ、シオン――。他の二匹にもお願いしまーす♪」

――――もの凄く楽しそうに……黒い笑みを浮かべて…。

「「はあああああぁぁぁ！！！！！？」」

「「フリー…“さん”っ！？」」

（鬼やな……）

その発言に、紅牙と狂牙は目が飛び出るくらいに驚いて大声を上げ、ジャンとナツは思わずフリーを「さん」付けにし、ケルベロスは心の中で思った。

その後、紅牙と狂牙も『雷（サンダー）』を喰らって黒焦げになったのは言うまでもない。

そして…王牙と紅牙をすぐ傍の木に縄で縛ったところに本物のシオンが来て、最初にジャンが声をかけた。

「あっ！シオン…っスよね？」

「うん。ごめんね…黙ってて…」

「別にイイって！コイツらなんとかつかまえれたし♪」

「……そうなんだけど」

シオンはそう言うと、フリーに支えられている長い水色の髪に着物を纏った少女――『鏡（ミラー）』を心配そうに見た。

すると、『鏡（ミラー）』は微笑んで言った。

「所有者（マスター）……私は大丈夫です…。カードの状態に戻ればこれくらいの傷…すぐに治りますから……」

「……そっか。ありがとう…『鏡（ミラー）』……」

そうシオンが言った直後、『鏡（ミラー）』の姿が崩れ一枚のカードになり、シオンの手元へと移動した。

シオンはそれを手に取ると、大事そうに抱えて、「よく頑張ったね…ゆっくりしてて…」と、まるで…我が子を思う母のように呟いた。

その間…ジャンは王牙達を見つめていた。

それを見たフリーが、仮の姿に戻ったケルベロスに不安そうに小声で聞いた。

「ねえ…ケルベロス…。ジャン…もしかして…」

「…わからん。けど…何も心配するほどのことやあらへんやろ？どうするかはジャン次第や」

「そうだね……」

フリーがケルベロスにこんなことを聞いたのにはわけがある…ジャンが王牙達に復讐をするのではないのかと心配していたからだ。

ジャンは王牙達を一頻り見つめ終えると、シオンに尋ねた。

「シオン…一つ聞いていいっスか？」

「なんですか？」

「王牙たちなんですけど…」

それを聞いただけで、シオンは理解したようだ。

シオンは笑顔で答えた。

「大丈夫だよ。ちゃんと手加減したから…すぐに意識を取り戻すと思うよ♪」

その途端だった。

いつの間にか意識を取り戻し、まだ縛っていない狂牙がシオンに襲い掛かった。

「このガキィィィッ！！！」

だが、

「「「させるかぁっ！！」」」

と叫びながら、ナツ・フリー・ジャンが飛び蹴りを喰らわして撃沈

し、木に縛り付けた後、ジャンが言った。

「シオン、バッボ、ケルベロス、フリー、ナツ…ありがとうっス…。おかげで大切なものに気付くことができて…それを守ることができたっス！ホントにありがとうっス！！」

「／／／／／そ…そんなことないです…」

その言葉を聞いてシオンは照れ

「へへっ！これくらいどーってことねえぜ！」

「そうやで！なあフリー！」

「うん♪それにこんなの…ボクたちにかかれば液状茶飯事だよ！」

「お茶漬けのことかそれ！？っていうか、それをいうなら日常茶飯事（にちじょうさはんじ）やろ！？」

ナツとフリーとケルベロスは胸を張り、フリーの発言（ボケ）にケルベロスがツッコミを入れここでおわるかにみえた…。

が、

「いーーーや、まだじゃ！」

『え？』

バッボの一言に皆が目を丸くしバッボをみた。

と同時に、「見ない方が良かったかも…」と一部の人が思った。

何故なら……

「こやつらがもう悪事を出来ぬ様にしなくては！！野菜など食えぬ様牙を全て圧し折り！！人を殺(あや)めぬ様爪を全て叩き折る！！！！！」

と、バッボが笑いながら狂牙を制裁(リンチ)していたからだ。↑

（（お、恐ろしい……））

それをみたナツとジャンはそう思い…

「うわぁ～…」

「相変わらず……バッボのヤツ恐ろしいなぁ…」

「あ、あはははは……」

フリー・ケルベロス・シオンはバッボの行動に各々の感想を抱いて、この戦いは終わった…。

「フム…中々やるな…シオン・クラウディオ…」

その様子を空から漆黒の翼を生やしている男――ディオロットが観察していた。

眼下には丁度、シオン達が見えるが…シオン達には肉眼でディオロットを見る事はできない高さから…シオン達の…否、シオンの戦い方を観察していた。

「だが、二人ともまだ成長段階のようだな…。暫しは監視した方が良さそうだな…」

そう呟くと翼をはためかせ、飛んで行った…。

その時…羽根が一枚、落ちた…。

シンｓｉｄｅ．

（……ん？）

シオン達が畑の後処理をしている間、俺は誰かに見張られている気配を感じ、空を見上げた。
だが、もう気配は消えていた。

（気のせいか……）

その時、漆黒の羽根が落ちてきた。
それを見て、俺の中の何かがざわついた。

――――なんで彼奴の羽根が……ここにっ！？

（シン？どうかしたの？）

（！！！）

シオンの言葉で我に返ると、いつもの口調で言った。

（なんでもない…気にするな…）

（そう？なら…ってこれなんだろう？）

シオンは自分の足元にある羽根に気付き、それを拾った。
それでシオンは合点がいったらしく、尋ねてきた。

（これなの？）

（……ああ）

（なんの羽根なの？）

（……さあな）

俺はとぼけると奥に引っ込んだ。

――ディオロット…貴様、今度は何を企んでいるんだ……

俺は…最も憎むべき存在であり……

自分の実兄であり…

3年前……シオンを殺した張本人である男の目論見を考えながら…引っ込んでいった。

ｓｉｄｅｏｕｔ．

＃０５「真夜中の戦い～後編～」（後書き）

まさかの展開きましたね…。

近々、オリキャラの紹介をしますので、どうぞお楽しみに。

#06「フェアリーテイルへ…」（前書き）

たぶんこれで、この話は終わりです。

っていうか…こんな調子だと…結構ヤバいな…。

#06「フェアリーテイルへ…」

フリーｓｉｄｅ.

それからしばらくたって…辺りが明るくなった頃…

バッチィ――――――――――――――――ンッ……

と、かなりいい音がジャンの家から響いた。

想像つくと思うけど…この音はジャンのお母さん・ジェーンさんがジャンの頬を思いっきり叩(はた)いた音。

もう“バッ”から“チィ――ン”までのタメがスゴいよ…。

因みにボクらはそれを…ナツとバッボは口を開けて、シオンとケルベロスは「あ～…」とすまなさそうに、ボクはシオンの後ろに震えながら隠れて見てた。

「“三つの牙”と戦っただって！！？どうして…そんな危ない事したんだい！！！」

ジェーンさんがジャンを怒鳴りつけ、さらに震える。
こ、怖すぎるよ…ジェーンさん…。
ジャンは叩かれたほっぺたを擦りながら、後退りしながら言った。

「ちょ…ちょっと待つっス母ちゃん！！シオン達の力を借りてあいつらを倒したっス！！あいつら、泣きながら逃げて行ったっスから…これで安心―「死んでたかもしれないんだよ――――っ！！！！！」

ジェーンはジャンに顔を近付け、さらに大声で怒鳴る。
そして、手を挙げる。

「この……」

（（また叩かれる！））

そう思ったジャンとナツ、ボクは目を瞑(つむ)った…。
でも、いつまで経っても痛そうな音はなかった…。
ボクが恐る恐る目を開けると…そこには……

「うっ…無事で……生きててよかったよォ……ジャン……」

泣きながら……ジャンを抱き締めるジェーンさんの姿と……

「……心配させてごめんよ……母ちゃん……」

同じ様に…肩を震わせてジェーンさんを抱き締めるジャンの姿があった……。

「うっ……あ、あかんわ……。涙腺が緩んで…涙が止まらへん……」

「母と子の絆か…これ程感動するものは…ないいいいいっ！！」

その様子を見て、ケルベロスとバッボはもらい泣きしてて…。

「へへっ♪よかったなぁ、ジャン！」

ナツはジャンに声をかけた。

「一件落着ってやつだね♪ねー、シーオンー♪」

「……そうだね…」

――――あれ？

「シオン…どうかしたの？」

「え？……なんでもないよ？」

そう言ってシオンは笑ってたけど…笑ってなかった。

いつものシオンの笑顔は…見てるこっちも笑顔になるのに…今回はそうじゃなかった。

今回のシオンの笑顔は…

シオンには似合わない、“作り笑い”だった……。

ｓｉｄｅｏｕｔ．

時間は変わりお昼頃…シオンは小高い丘にいた…。
両膝（りょうひざ）を手で抱えた、いわゆる体育座りをして…空を見ていた。

（…どうしたシオン？元気がないようだが…？）

「…そうかな？」

周りに誰もいないため…シンの問いに、シオンは声に出して答える。
するとシンはため息をつき、言った。

（お前は…何かあると誰もいない場所に来ては…今の様な座り方をして空をみる癖があるからな…。すぐに分かったぞ？）

「！？私そんな癖があったの！？っていうかシン！何で知ってるの！？」

（…先日に言ったはずだが？）

「え？……あ」

シオンは一昨日の夜…入浴中にシンが声をかけてきた事を思い出して顔を赤らめ、膝の間に顔を埋めた。

「ぅ～…／／／／シンのイジワルぅ～…」

（？俺は何もしていないが？まあ、そんな事は兎も角…どうしたんだ？）

若干シンの言葉に傷ついたが、シオンは顔を上げて言った。

「実はね…お父さんとお母さんの事…思い出してたんだ…」

フリーｓｉｄｅ．

「何んてぇ！？それホンマかナツ！？」

お昼ご飯を食べてた時に…ナツの言葉を聞いたケルベロスが叫んだ（因みにご飯はオニギリ）。

それをボクは「汚いなあ…」と思いながら眺めていた。

「ホントだって！っていうか…そうだったら、そうとそうと言えよ！」

「…二人とも…。喋るか食べるかのどっちかにしてくれないっスか…？」

負けずに言い返すナツに、ジャンが呆れながらツッコミを入れ、ケルベロスとナツはすぐ飲み込んだ。

すかさずジャンが「ちゃんと噛んでから飲み込んで！」と、再びツッコむ。

まあ、聞こえてないみたいだけどね…。

理由は…

「何やとぉ！？ナツが言わんかったのが原因やないか！！話しとったらわいらも話しとったわボケェ！！」

「はあ！？勝手にオレのせいにすんなよ！！ってか！誰がボケだ！？」

「おどれ以外に誰がおるっちゅーねん！！」

口喧嘩になってたから。

「あ～あ…また始まったね…。どのくらいぶり？」

「ウム…半年ぶりくらいじゃな…」

「半年って…意外と期間、長っ！！」

ボクとバッボの会話にジャンがツッコみ、それにボクは「まあね」と答えた。

あ、そーいえば…

「ねえ、バッボ。…シオンとボクらが会って…どのくらいだっけ？」

「ム？確か…あの日の一週間後ではなかったか？」

あの日…か…。

実はボク…そのあの日って何のことか知らないんだよね…。

バッボも知らないらしいし…まあ、会ったのって去年だから仕方ないけど…唯一知ってる人は…

「第一なんだよアレ?!どっからどーみても、お前に見えねーよ!!」

「うっさい!!わい自身も気にしとんのやから、ほっとけぇ!」

口喧嘩続行中だし…。

はあ…まともに答えてくれるのってジャンやジェーンさん…それに…

そこでボクの思考はいったん停止し、再び動き出した時…

「あ――――――っ!そうじゃん!!シンに聞けばいいんじゃん!!」

『うるさい!!いきなり大声出すな!!!!』

【しばらくお待ちください…】

「で、フリー…なんでいきなり叫んだんや?」

落ち着いた時にケルベロスが聞いてきた。

ちなみに、ボクの頭にはタンコブが四つできていた。
理由は簡単、ケルベロス達が殴ってきたから。
っていうか…確かに叫んだボクも悪いけど…何でみんなしてボクのこと殴る必要があるの！？

反論したい気持ちを抑えて、ボクは聞いた。

「えーっと…あの日の事知りたいなあ…って思って…」

「……あの日…か…。すまんがわいの口からは…いや、絶対にいう事はできへんのや…。それがフリーやバッボの頼みでも…な」

――また？

実をいうとこの質問…七騎士（セブンウォーリアーズ）のみんなにもした。

けど…回答はみんな「言えない」とか「知らない方がいい」って言ってた。

なんで？

この質問をすると…みんな口を揃えてこう言うんだ。

「シオンのため」だって…。

だったら教えてよ…。

だってシオンはボクに…ううん、ボクらにとっては大切な存在で…

ボクにとっては初めての…力（サーガ）の制御者なんだから…。

なのに…どうして教えてくれないの？

――――ひょっとして…。

ケルベロスはボクの…ボクらのこと信用してないの？

不意にそんな事を思ってしまった。

そんなこと…あるはずないのに…。

まあその後、作業を再開したから…忘れたけどね。

ｓｉｄｅｏｕｔ．

シンｓｉｄｅ．

（…成程な。それで元気がなかったという訳か…）

「うん…」

あの後…俺はシオンに元気がない訳を聞いて納得した。

何でも、今朝のジェーンとジャンのやり取りを見て、両親を…殺された両親の事を思い出してしまったらしい…。

無理も無い…当時のシオンはまだ5歳の子供だったのだから…。

その頃の幼いシオンにとっては…あまりにもその現実は酷だった…。

――奴め…何度俺を怒らせれば気が済むんだ？

もし体があったら、俺は拳を握りしめていただろう…。

それこそ…血が出るまで…。

俺は…元凶を知っている。

だからこそ…一刻も早くシオンの体を取り戻す。

「ねえシン…一つ聞いてもいい？」

（なんだ？）

シオンは間をおくと言った。

「私の前から…消えたりしないよね？」

（当たり前だ。何故俺が消えなくてはならんのだ？）

俺がそう答えるとシオンは「そう言うと思ってた…」といって微笑んだ。

その笑顔は…天使のようだった…。

ｓｉｄｅｏｕｔ.

その後…シオンはジャンの家に帰り、家の中で会話している時にある事を話された。

「え…えええええぇぇぇっ！！？ナツさんって…フェアリーテイルの方だったんですか！？」

「そんなに驚くことか？」

シオンのオーバーリアクションに半場呆れたような、傷ついたようにナツは言った。

実は…ナツはあの魔導師ギルド…“妖精の尻尾（フェアリーテイル）”の魔導師らしい。

そして…元々シオンは妖精の尻尾（フェアリーテイル）に入るつもりだった。

だとしたら…シオンのとる行動は一つ。

「あの…ナツさん…妖精の尻尾（フェアリーテイル）に連れて行ってくれますか？」

「べつにいいぜ？けどその代り…」

ナツはズイッと顔を近付けて言った。

「オレのことは“ナツさん”じゃなくて“ナツ”で、タメで話すこと！！いいな？」

「ぁ……うん、わかったよ…ナツ…さん／／／／」

その途端、ナツがズッコケたのは言うまでもない。

＊＊

その日の夕方…小高い丘にシオンとナツら五人（？）と、ジャンとジェーンの親子、それにバッボの制裁（リンチ）で改心した“三つの牙”がいた。

「本当に行くんスか？」

「うん…元々そのつもりだったから…」

「そうっスか…。また会えるっスよね？」

「違うぜジャン！また会おうだろ？」

「！そうっスね！」

シオンとナツ、ジャンはまた会うことを約束し…。

「はい！ケロちゃん、フリー君の大好きなパンプキンクッキーだよ

！」

「おおっ、おおきになあジェーンはん！！」

「わーい♪ありがとうジェーンさん！！」

ケルベロスとフリーはジェーンのお手製クッキーを貰い…。

「お主ら…ちゃんとジャンとジェーン殿の手助けをするんじゃぞ！！」

「「「わかってます！！バッボの旦那！！」」」

何故か“三つの牙”はバッボに敬礼し、そう答える。

そして…別れの時。

「それじゃあ…」

「またな！ジャン！！」

「五人とも～また必ず会おうっス～！！」

そう言って…シオンとナツ達はジャン達から離れていった。

ナツは自分の家に帰るため…。

シオンはこれから働き、自分の家族と呼べる場所に行くため…。

その場所の名は――――――

――――妖精（フェアリーテイル）の尻尾……。

#06「フェアリーテイルへ…」（後書き）

いよいよ…フェアリーテイルに行きますよ…。

主人公のプロフィールは作成中ですので、しばらくお待ちください。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7684y/

FAIRYTAIL　～姫と半吸血鬼～

2011年12月8日23時50分発行